

有難涙にくれて伏し拜み居たる老人を、後ろにして、もこ來し道へ立ち歸りながら、マリーは斯く思へり。

私は、折角長くかゝつて溜めた金は、みんなあの老人に遣つてしまつたから、もう、お祭りの時に、新らしい着物を着る事は出来ない。……けれど、私は思ふワ。……立派な着物を着るよりも、立派な行ひをした方が、神様はお悦びなさる。……で、私は、今日、人を助けたんだから、立派だワ。……オ、嬉しい。げに、少女が考への如く、心に着たる錦こそ身に纏へるよりも、數等増りて、麗しくはありけれ。

二十七

グレースダルリング(英吉利)

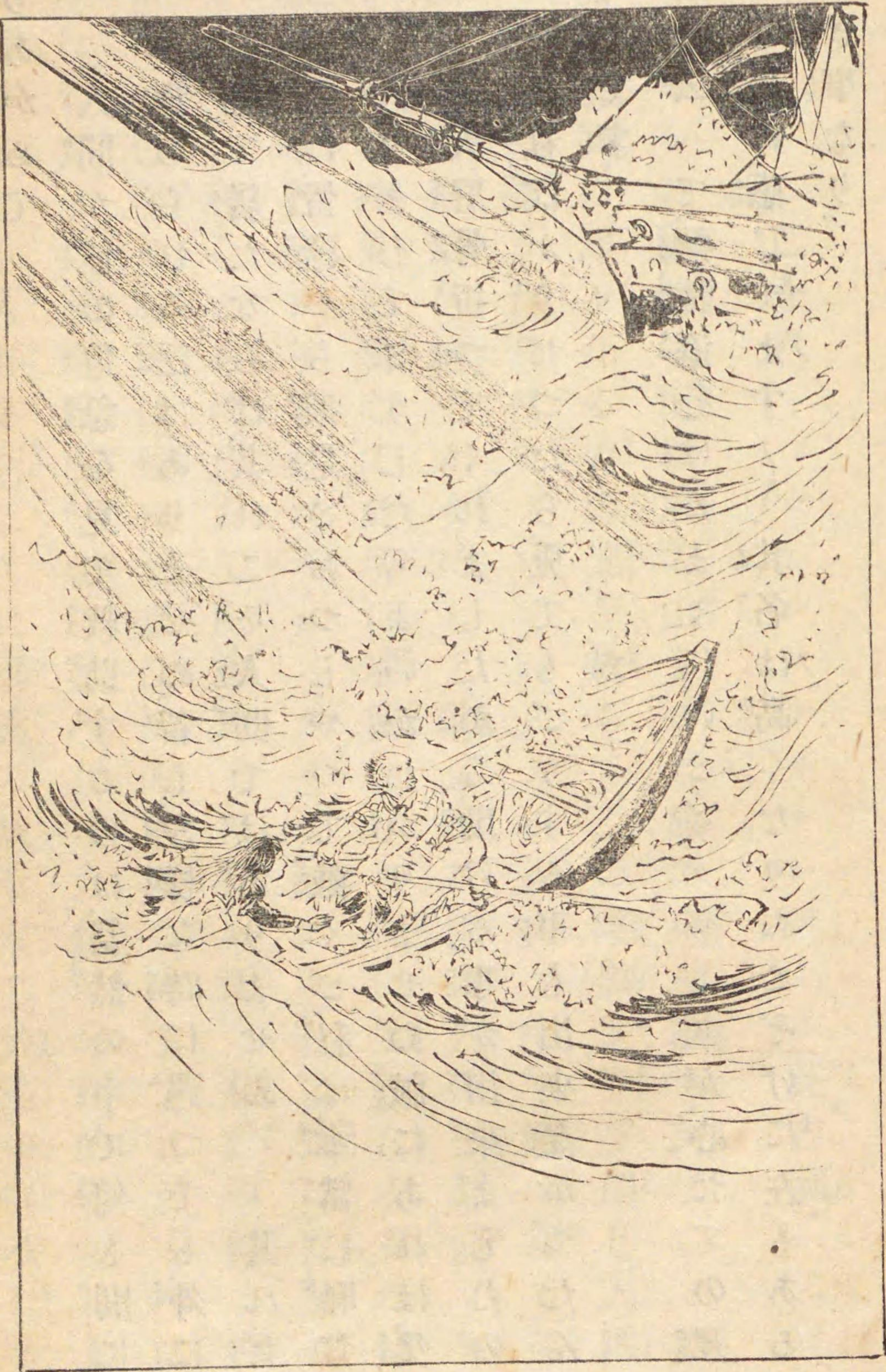
グレースダルリングは、英國のノアサンベルランドといふ海

岸の燈明臺の監守人ダルリングが女なり。一千三百三十八年の九月、ホアハルスハヤゴ呼べる蒸氣船、ノアサンベルランドの近海にて、はやてに遇ひぬ。船の構造も、十分堅牢ならず、機械も亦能く整頓せざるもの見え、高波にゆられ、て、グレートハルカスの巖ほに吹きつけられ、もろくも、船は大方破れ、砕け、船中の人々も、今か魚腹に葬られぬべしと見えて、いと危し。グレートハルカス、このノアサンベルランドは、其距里極めて近き間なりければ、ダルリングは、遙かに難船の状を見て、いかにもして、救はざるやと思ひ、所持の小舟を漕ぎ出ださんとし、けれど、烈風波を吹きて、恰も大山の崩るゝが如く、うづ巻き立つる凄まじさに力及ばず、空しく其方を打ち眺めて居たるに、少女グレースは、父の邊りに走り寄りて、

仁慈の行ありし少女

阿爺、……早く救ひに行きませう。サア早く、アレもう船が沈みます。ア可愛さうに乗組人がみな死にます。

ご自ら權をこりて、父を勵まし、危険を犯して、渦巻く波を凌ぎ、遂に難船に達して、船中の九人までを、我が小舟に助け乗せもこの岸へ漕ぎかへりぬ。かくて程無く、船は沈み残れる人は、みな底のみくづこ成り果てけり。若し其時、グレースが、惻隱の心を起し、身の危きを忘れて、救助の舟を出ださざりしならば、この船にありごある人は、悉く命を失ふべかりけるに、少女が、勇氣と仁慈によりて、九人の乗組員を助けつるこそ、誠に感ずべく、賞すべき事なりと、人々云ひづき語りつたへて、此所彼所から、グレースに遇はんとして、來たり訪らふ者あり。又此形狀を畫にかき、少女が像を寫真にこりたしなご云ひすくむる者あれば、グレースは顔打



仁慈の行ありし少女

ちあかめて、

人間が他の危急を見て救助するのは當然の事で何も別に
褒められる法はありません。若し左様な時に遇つても外に
見て居たならば其れこそ人間ではありませぬ。……其れだ
のに、皆様から彼是とおつしやつて戴くご私には本當に恥ぢ
入りまして、ごうしたらよいかわかりませぬ。誠にあれは父
が大層骨折つてくれましたから、助ける事が出来ましたの
で、私ばかりだつたら、兎てもごうする事も出来なかつたん
です。

斯く云へて彌謙遜しけるまゝに、いごご、グレースが心だての凡
ならぬに、感じて、ますます、其名は高くなりぬごぞ。げに左もある
べき事なり。

二十八 プロレンス、ナイチンゲール(英吉利)

クリミヤの修羅の街に屍の山をつき、血の泉を漲らせて、いご物
凄き折柄に、洋々たる春の光を放ちて、この暗黒世界を照し、天國
の樂園に導きたりける。プロレンス、ナイチンゲール嬢は、嘗て英
國なる富豪の一紳士が女にして、其父母が伊太利の一都府プロ
レンスの風景を愛して、此所に滞留しける程に生れたるなれば、
即ち其地名をとりて、プロレンス、ナイチンゲールと號けたりけ
るに、この麗しき名は、やがて、歴史の上に花を添へ、慈愛の神を仰
がるゝに至りぬ。こは、後にぞ思ひ知られぬ。ナイチンゲールは、
生れながらに、慈悲思慮の念に富みたる人なりしが、齡僅かに七
八歳の頃より、人形を翫びては、看護の状をなし、犬猫の病み且つ

仁慈の行ありし少女

傷けられたるを見ては、これを助け救ふをもて、此上無き樂しみ
 ごしけるごぞ。斯かる有様なれば、若し其家の婢僕なごが病み臥
 す事あれば、日に幾度ご無く、そが病床を見まひて、其苦しみを問
 ひ慰め、又自分に貰ひたる菓子、果物なごをも、分ち與へて、只管こ
 れらの爲に力をつくしぬ。ある日のこご、蘇格蘭の牧師某が飼犬
 カップご號けたるが、路にて、いたづら兒童の爲に捕らへられ、散
 々に打ち据えられて、息も絶えくゞに苦しみ居たるを、幼きナイ
 チンダールは見附けて、いたく憫然がり、眼に一抔の涙をたくへ
 て、

ア、憫然、……カップよく。

ご云ひて、さし寄りたるに、カップは、左も悲しげに、又嬉しげにあ
 まえたる如き、聲して　ウ、ウ、　ごうなりつく、動かれぬ體を

摺りつけて、何事をか訴ふるに似たり。其時は、既に飼主の牧師も
 來たりて、傷口を改め、且つ其手當をもなさんごせしなれごも、カ
 ップは、全身の痛みに耐へずしてや、敢て飼主に手も觸れさせず。
 強ひて觸れんごすれば、噛みもつくべき容子なりしに、可憐なる
 嬢が慰めには、畜類さへに感じたるものご見えて、深く嬢が同情
 を寄せたるを悦ぶさまなりしかば、嬢は重ねて、

カップよく、汝は賢いから、牧師のおつしやる通りにしな
 ければいけないよ。左様すれば、今直ご樂になるから子。

この詞を聞きわけたるにか、犬は遂に、牧師が爲すまくなりぬ。
 牧師は、犬の總身を改め見て、

宜い鹽梅だ。大層敲かれたやうだつたけれごも、骨に別條は
 無い。……然し、後足を大變に撲られたご見えて、焮傷して居

る。これは奄包で散らさねばいけぬ。

ナイチンゲールは、これを聞くこやがて、

牧師……奄包ツて、ごうするのです。

牧師は答へて、

其れは、布片を湯で絞つて、局部へ宛て、そして、其上をそつ

ご巻くの。

嬢は欣然として、

じゃア私が其れをしてやりませう。

牧師は打ちほく笑みて、

本當に貴嬢は感心な兒だ能くそんなに、犬をかあいがつて、
下ださる。……けれども、御宅では、何をして居るか、お案じ
にもなりませうから、もうお歸りなさい。



嬢は頭を打ち振りて、

イ、エ、大丈夫です。……ごうぞ、私に奄包をさせて下さい。

爰に於て、牧師も遂に其言に任せ、自ら布片を取り來たりて、そが

方法を教へければ、嬢は、やさしき聲して、犬を慰めながら、かたの

如く奄包を施しけるが、まことに小供の手際も覺えぬまでに、

申分無くなし果てくけり。牧師もこれを見て、

實に、嬢が物を憐んで、而して、かやうに看護の勞をこる事は、

他の小供が、ちようご、かあいらしい人形や、美しい花を翫ん

で遊ぶの、同じやうに、心から楽しんでするのである、まことに

不思議な兒だ。

と歎じたりき、かやげに、恩禽獸に及ぶごは、大徳の人にこそ云

ひ習しつる詞なるが、ナイチンゲール嬢は、幼にして、既に斯くの

如き天性の慈惠心なりけり。長じて、仁徳の名を竹帛に垂るゝ、左
もありぬべき事なり。

學問に秀でたりし少女

二十九 徐惠(支那)

唐の徐氏の女惠は、生れて五箇月目に、物云ひそめき。すべて、餘り
に年に似合はず、伶俐の過ぎたる人は、やはり、一種の病的にて、大
抵は、大人に成りては、ぼつごしたる人になるか、又は病を發して
天死するかを免がれぬものなるに、此少女は、身體も健かにて、記
憶も、亦人に優れたりき。斯くて四ツに成りける頃、ほひには、論語、
孟子、なごいふ書を讀み習ふのみならず、其れを暗誦して、少しも
過つこと無く、八歳に及べる程には、誰れ教へざるに、文章を綴り

學問に秀でたりし少女

けるが、往々其絶妙に人を驚かしけり。並々の小供の外に出でく遊び戯れ、翫具を飾りなごして悦ぶ程の齡に、惠はたゞ明けても暮れても暇さへあれば、書齋の中に閉ぢ籠りて、書を読み、物書くに餘念無く、殆ど手に書卷を放つこと無かりけるこそ、惠妙齡に達して後は、いよく博識宏才の名世に隠れ無く成りにければ時の帝、太宗召して宮に入れ、才人といふものに擧げられ、賢妃と稱されき。この唐の太宗といふ皇帝は、名高き英主に在しければ、も帝位に即きて、年久しくなるまゝに、やうく心のまゝに振舞はるゝこと無きにしもあらず。土木の工事を起し、干戈をしばく動かしなごし給ひければ、民も竊かに憂へて、よりく不平の聲も洩れ聞えぬ。賢妃いたく心を苦しめ、折角の御鴻業も、斯かる御ありさまにては、遂に終りを全くしたまふ事難きに至るべし。

しこてすなはち書を上りて、其然る可らざるよしを諫め申しけるが、文章の意味明らかにして、詞のあやめでたかりければ、帝深く感じて、大いに其行ひを改め給へりこそ、斯くこそ學問は眞に價あるものご云はるべきなれ。

三十 宋若昭(支那)

唐の宋廷芬といふ人の五人の女は、みな性伶俐くして、善く文を作るに名ありしが、中にも次女の若昭は優れて、ここに文書くわざに秀でたりき。しかのみならず、心ざま正しく潔く、つゆばかりも汚れ曲めるを見聞くことを好まざりけり。妙齡になりて、女論語といへる、女子の修身書を作り、最も好き評判を博しぬ。女論語は、今も女四書のうちに取り入れられて、我が國にても往々女學

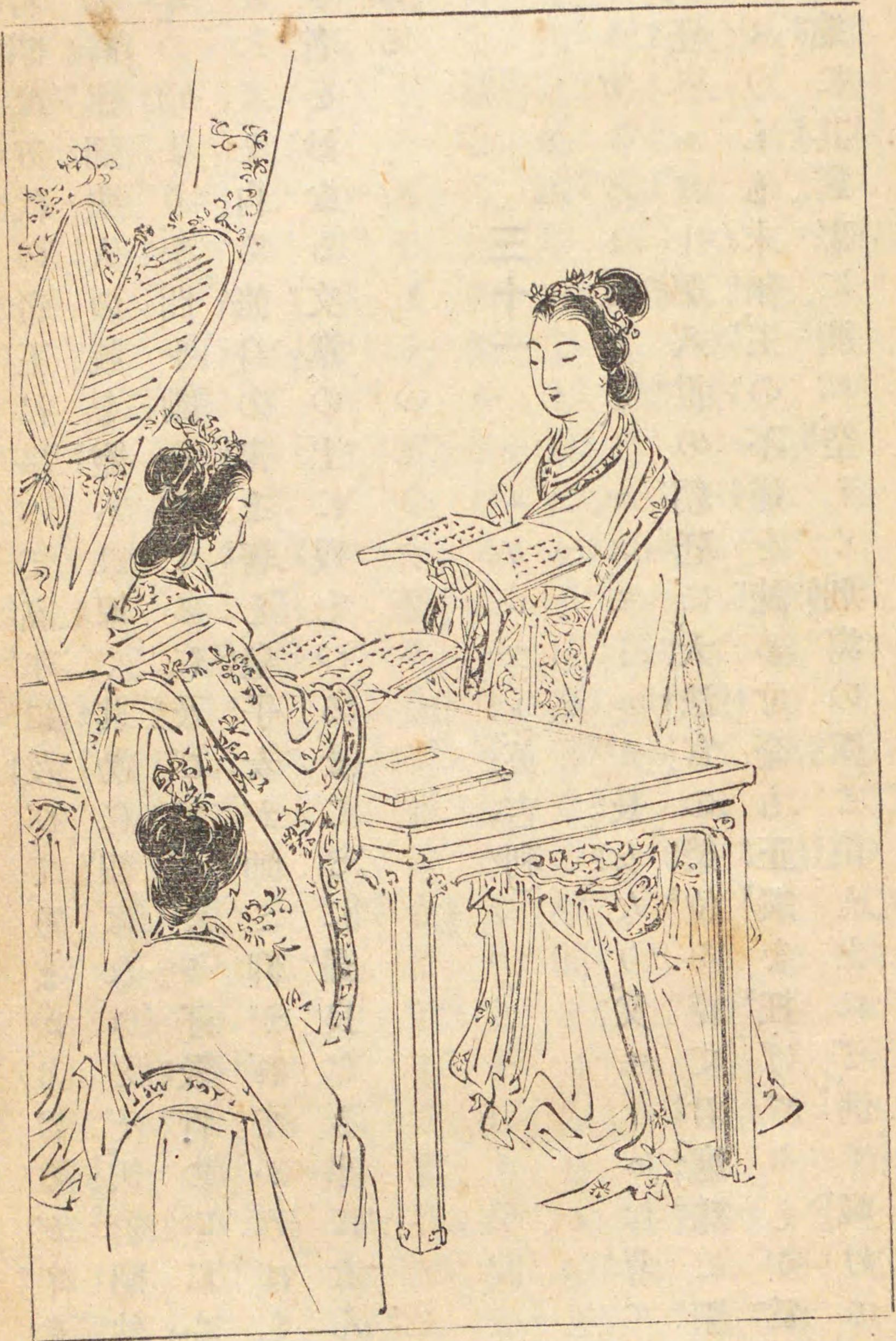
校の教科書に用ひられつゝあり徳宗皇帝召し入れて嬪ごせん
ごしたまひけれごも若昭は深く辭退して、

仰せはまここに有難うは御座りますれご賤女は少し思ふ
よしが御座ります故何卒一生獨身で居たいご存じますか
ら御免を蒙ります。

ご申して敢て詔に應ぜすますく、學問を勉強しけり帝は若昭
が清く氣高き志しの遂に曲ぐ可らざるを悟つて、

彼女は實に世に得難き少女である。……今は何事も彼女の
願ひのまゝにさすがよろしい。

ごありてこれより若昭の事を女學士々々々と呼び給へり斯く
て諸皇子皇女をもみな若昭が弟子させられ又帝のいろくの
文書類はしばく下問せられにけり。



學問に秀でたりし少女

若昭は、五代の帝王に事へて、高年に及びて、みまかりけるが、卒せし時、梁國夫人の號を贈られ、厚く其功に報はれきとぞ。宋若昭、幼年の頃より、學問を勵み、長ずるに及びて、深く、女子教育の事に心をつくし、自ら修身の書を著し、皇子女が師と仰がれて、かうばしき名を、妙なる文章の上に残しつる、まことに最良じき事になんある。

三十一 マルガレット(英吉利)

マルガレットは、サー、トマス、モールが長女なり。父モールは、嘗て英王ヘンリー第八世の朝廷に、大法官の榮位を得て、君寵殊に深かくりしも、末年、王の不道を諫め、寸毫も正義を枉げざりしが、爲に、遂に其震怒に觸れ、空しく刑場の露と消えたれど、清く輝ける

名は、後世の歴史を照らしたりける、忠義の丈夫なりき。而して、この女も、亦父の志しに劣らず、孝義の爲に、聞えたる人なるが、その其大人となりての後の事なれば、爰には、たゞそが若年の時に在りける、學業の事に就きてのみ云ふべし。マルガレットが生れし時代は、英國に於ても、未だ女子に高等なる學問をせしむるの必要を認むるもの無かりけるに、モールは、ひこり、女子にも、學問を勧めざる可らずとの説を主張し、先づわが女に就きて實行せしに、四人の小供の中、マルガレットは、最も天才ありて、且つ學を好む。ここ此上無かりければ、其寵愛も、亦一しほなりき。斯くて、マルガレットは、齡十四歳といふ年、既に、羅甸希臘の諸書を読み、且つ解し、羅甸語をもて作れる詩は、父と優劣を競ひて、孰れを孰れとわき難きまでぞありける。然れども、マルガレットは、嚴肅なる庭

訓によりて、少しも驕り高ぶりたるさま無く、斯くも他の女子に
 高等なる教育なき社會に交はりながら、更に己れ物識り顔する
 こともあらず。たゞ勉めて、貧しき民を恵み、大方の人には、やさし
 く懐かしくつきあふやうにしければ、始め、女子に學問さするは
 然る可らず。こいひし人も、終には口をつぐみて、この年若き女子
 が行ひに感心し、深く同情を表するに至れり。こぞ、さればこそ、後
 に、父が冤死の時にも、マルガレットは、義士が女として、恥かしか
 らぬ舉動をなしたりけれ。

辯才に長たりし少女

三十二 趙津吏女(支那)

むかし、周の世、趙といふ國の津吏の女に、媚と云ふ者ありけり。趙

の相(總理)大臣の如き、重き役、趙簡子が楚の國を伐つて、何時幾
 日に、其津に行くべければ、渡船の用意して置くべし。と、約し置き
 たり。さて、其時になりて、簡子、津に到りて見るに、津吏は、酒に酔ひ
 臥して、呼べども起きざりければ、簡子、其命令に違ひたるを怒り、
 憎くき奴。……引き出だして、首を刎ねよ。

と命じぬ。是時、吏の女、媚、惚て、走り出で、叮嚀に禮を施して云ふ、
 やうは、

殿様、まことに申譯が御座りませぬ。……然し、父がかやうに
 酔ひつづれましたのは、斯う云ふ譯で御座ります。近來、この
 渡場では、兎角俄かに風が起つたり、波が立たつり致します。
 其れで、時々渡船も覆る事があります。是れは水神の祟り
 だ。と申しますので、父は、若し御船に恙あつてはならぬ。と、非

辯才に長たりし少女

常に心配致しまして、御出の前に、九江三淮の神を祭りまして、御酒を上げました。さて、其祭が事無く済んだもので、御座りますから、祭に與つた、神主や巫や、其他の人々を犒ひまして、神酒のわろしを薦めました。故に、つひ、自分も、相手を致しました所が、さうしたものでか、あの位な分量では、常に決して、酔ひは致しませぬのに、なぜか、急にあんなになりまして、何とも恐れ入ります。是れを、ごぐめませぬ、私は、猶更、罪が御座りますから、さうぞ、私を代りに、お殺し下ださりまして、父は、お許しを願ひたう存じます。

簡子は、これは女の父の罪を免がれしめんとして、云ひ繕ふなりと思ひ、

イ、ヤ、これは汝の罪では無いから、汝を殺して父を助ける

譯にはゆかぬ。

女は、なほも屈せず。

でも、殿様、酔うて居る者をお殺しなさるのは、死人を罪するやうなものですから、醒めてから、お殺し成されませ。

云ひける其詞は、まここに道理ありて聞えければ、簡子も遂に思ひ止まりて、さて、楫手に船漕がせんとするに、一人不足しければ、娟は、進み出で、

私が父の代りは致します。船は上手に漕ぎます。

さて、かひなく、しく身支度するを見て、簡子、其れは往かぬ。征伐に、若い女子、船をこもにしたと云はれては、我が面が立たぬ。

女は、是れを聞きて、ほくご打ち笑ひ、

其れは殿様の仰せごも覚えませぬ。殿様はたゞ此津を御渡り遊ばすが御主意で御座りませう。船漕ぐ者が女であらうが男であらうが、そんな事は、ごうでも宜いじや御座りませぬか。何も征伐の途で婦人ご同船して、お遊び成されたご云ふ譯ではありませぬから。

この少女の詞は實に尤なる次第なれば、簡子も其れに従ひて、婿をして父の役に代らしめき。婿は悦びて、船を中流に漕ぎ出でつゝ、船歌を謡うて、

風恬浪息、ごいふ詞を用ひて一詩を賦し、簡子の心を和らげとれば。

簡子、大いに悦びて、

汝は、まここに世に珍らしい才女である。我が夫人ごなすべ

ければ、いかに此請求に應ぜずや。

ご勧めければ、婿は容ちを正しうして、

思召しは有難う御座りますが、私には、父母が御座りますから、父母の命じた所で無ければ、私に、婚姻の約束なごを致す事は出来ませぬ。故折角ながら、断り申上げます。

簡子は、ます、此詞に感心し、凱旋の後、津吏の方へ使者を遣はし、父母の許可を受けて、婿を夫人に迎へけりごぞ。

婿がごときは、其辯舌才氣の人並に優れたるのみにあらず、實に尊ぶべき、真正の少女なりかし。されど、この女、若し正しき行ひご、高き志しごを持ちたりごも、能く簡子を説き破るべき辯説、能く簡子を感じせしむべき才學、無かりしならんには、決して怠れる父が罪を解くよし無かりけんを、げに最良き言行にこそありけ

れ。

三十三 宿瘤女(支那)

齊の國に宿瘤女と呼ばるゝ少女ありけり。こは頸に一つの大きな瘤ありければ、人あだ名して斯く呼びけるが眞の名のやうに成りけるなりこそ。或日野に出で、桑の葉を摘み居たりしが、ソレ王様のお通りだ。

西東より人々走り集まりて拜しけり。されども宿瘤少女は、なほ依然として桑採り居たるを、齊の閔王車の中より、これを見て、不思議に思はれ、隨行の臣を招ぎて、

アレ彼れを見よ。あの桑畑に桑採る少女を……皆の者は、寡人を觀るごとて、人を突ひ退け、驅け抜け、走り騷ぎて、此所近く

集まり來るのに、彼女は一人横目もふらずに、やはり桑を摘んで居る。いかにも普通ならぬ少女、尋ねて見よ。

従者は畏こまりて、急ぎ其邊にいたり、

コリヤ、女、汝は今、王様のお通りがあるごとて、誰れも、拜觀に餘念無きを、汝は何故に、此所に遠く離れ居て、やはり、

桑ばかり摘んで居るぞ、仔細を語れ。

少女は、此詞を聞き、しづかに、桑摘む手をごぐめ、

イエ、別に何の譯も御座りませぬ。私の父母は、私に、桑を摘んで來い、と命じましたので、王様を拜んで來よ、とは云ひつけません。で、したから、たゞ、私は、父母の命に従ひて、私の責任をつくすまでとす。右の次第、故御免遊ばしませ。

さて、またもこの如く、桑を摘み始めぬ。従者は、走り還つて、斯くく

辯才に長たりし少女

と語り申しければ、王深く感心せられて、ア、ごうも珍らしい賢女である。寡人が夫人と爲すべければ、寡人が副車に乗れ。

と云はれたるに、宿瘤はおしかへして、

仰せを背き奉るは、畏き限りで御座りますが、私には、父母が御座ります。其許可の無い間に、人に伴はれますのは、假令、王様であらせられうとも、淫奔に相違御座りませぬ故、固く御断り申します。

宿瘤は斯く云ひ捨て、忙がはしくもこの桑畑に隠れぬ。閔王はますく感心し、改めて、其父母のもごへ、結納ごして、金百鎰を贈り、夫人に迎へられき。父母は、女の出世に夢かごばかり驚き悦び、せめてある限りの正服をも着せ、身の化粧をもさせて、立ち騒

ぎけるを、宿瘤はおしごぐめて、

御兩親様、其れはいけませぬ。私が王様に御目にかゝつたのもこの日常の粉装でしたに、今急に粧ひを凝らし、形ちを改めたらば、王様がお見違へ遊ばすかも知れませぬ。左様な事は致さぬ方が宜しいので、御座ります。

さて、桑こりし褻の衣のまゝにて、宮に入れり。王は、又其日還りて、宮中の夫人達に、寡人は、今日出で遊びて、賢夫人を得た。明日は、其れを迎へ來

るであらう。

と申されければ、夫人達は怪みて、

マア、誰れでせう。王様のお目に止まるやうな賢女は、……左様な人が、お國に在るご云ふことは、さつぱり知らなかつた

なご云ひあへりしが、人々に傳かれつゝ入り來る婦人を見れば、こはいかに東部の村人が女にして、しかも大きな瘤ある片輪女なりければ、皆かたみに眼と眼を見合はせて、

マア、王様はごう遊ばしたんでせう。

さて、くつゝご忍びて笑ひけり。王これを聞きて、

汝達は、彼女が褻の着物のまくで、粧ひも何もしないから、穢らしい、百姓の女だご、思ひ侮つてるけれども、彼女も亦汝達の通りに、粧へば、立派に見える。粧ふご粧はざるごで、大層違ふものだ。

ご申されつゝ、更に宿瘤を顧られければ、宿瘤畏みて、まここに左様で御座ります。まして、堯舜は、仁義を以て、御身

の飾りごし給ひ、茅葺の屋根を切り揃へず、彩らぬ階は削らぬまくにて、御衣も、たゞ寒暑に耐ふるまで、御食も、たゞ營養を取り給ふに過ぎざりけれども、今に至るまで、天下の民は、其徳に浴して居ります。これご反對で、桀紂は、仁義を以て、身を飾る事を知らず、臺を高くし、池を深くし、後宮の女ごもは、みな綾錦を着、寶玉を弄んで居りしかば、今に至るまで、其不徳を、天下に忌まれて居ります。其れで御座りますから、其飾るご飾らぬごには、大きな相違があります。しかも、其飾り物のいかなによりて、徳をも増し、徳をも減じます。御座りませう。

斯く云ひしは、この夫人達が、身には、錦繡寶石等を飾りながら、心に仁義を飾るごことを知らずして、人を笑ふは、笑止千萬の事なり

辯才に長たりし少女

この意にて暗に其れを抑へたるなり。
 夫人達は、この宿瘤女が道理ある辯才に驚歎して、うら恥かしく
 思ひければ始めの容子に引きかへて、みな顔打ち赫めつと、一言
 の答へもなさで、さしうつぶきてぞ居たりける。閔王は、宿瘤が詞
 にいよく感じて、わが眼力達はざりけり、深く満足せられ、遂
 に立てと后とせられぬ。
 宿瘤后となりし後は、ますく其身を慎み行を正しくし、能く其
 後宮をおさめ、王を助けて、善政を民に施したりし。かば、未だ數月
 を經ざるに、齊の國能く治まりて、近國の諸侯みな齊に靡き従ひ
 けり。宿瘤は、斯くの如く、徳高き婦人なれば、たぐに辯才に長けた
 るのみにはあらねど、其詞の最も巧妙にして、能く人を動かすに
 足るの力ありしゆゑこそ、閔王に知られて、化を大國に及ぼした



辯才に長たりし少女

るなれ。されば、人の徳は、其才智によりて、いよく明らかに、其辯舌によりて、始めて、外に發すべきなれば、能く勤め學びて、有用の材となるべきなり。

三十四

アン、ルイ、ゼルマン(佛國)

アン、ルイ、ゼルマンは、佛蘭西國王政の末路、易十六世の相となりて、財政を回復せんご計りたる、子ツカ一の女なり。家もごより富みて、母夫人、最も嚴格の人なりければ、其女を教ふるに、いたく心を盡して、幼きより、寸時の暇も無きまで、學問、技藝を修めしめた。りしかば、一時は、この天才ある少女も、健康を損ふに至りぬ。アンは、幼少の頃より、文作ること、に長じ、又能く、他の文章を批評せり。然れども、アンが最も得意とする所は、談話の妙なりき。アンは、十

四五歳の時より、大人を相手ごして、縦横に辯説を弄する時は、學識あり、才幹ある所の大人も、立つ足も無く、まくし立てられて、いづも、この少女が説に從はざるを得ぬ事となりぬるを常ごせり。されば、アンは、少しく高慢ぶる、學者ぶるの、容子ありて、其頃より、甚だ大人らしき風なりき。彼女が、辯舌は巧みにして、淀み無く、氣のむく折には、數時間しやべり續けても、更に勞れたる容子も無く、又聲の枯れたるやうも無かりき。而して、聞く人、亦毫も倦み飽くこと無く、いつまでも、其面白き咄しを聞かんことを希ひるほどなりき。云へり。アンは、長じて後、スタール男爵に嫁して、マダム、ド、スタールと呼ばれ、當時歐洲全土に雷神の如く響き渡り、鬼神の如く震ひ恐れられたる、一世帝ナポレオンが、眼の上の瘤ご忌み憚られし程の、婦人ごはなりけるなり。

辯才に長たりし少女

婦人が嘗て、日耳曼に遊びし時、子一ベル、其辯説の巧みなるを歎賞して、

彼の女は、甚だ活潑にして、誠實なる人なり。極めて多辯なれども、言語明晰にして、聞く人をして、みな面白しと感ぜしむ。云へりしにても知るべし。

技藝に秀でたりし少女

三十五 趙達妹(支那)

三國の時、吳主孫權が臣、趙達といふ人の妹に、極めて器用の少女ありけり。少女は、能く畫を巧みにするのみならず、刺繡に秀でたること、實に、眼を驚かすばかりなりけり。或は數尺の帛に、龍虎を繡ひ、或は方寸の絹に、花鳥を繡ふなど、更に人の業とは覺えざり

き吳主、群臣を召して、吳の山川地勢、及び軍陣の圖を畫かしむべ

き妙手を撰び出ださしめき。其時、趙達が云ふやう、

達が、自身で、お薦め申上るのは、甚だ恐れ多い次第で、御座りませんが、達が妹は、まここに、畫の上手でありますから、これにお命じ下ださりますしては、いかゞで御座りませう。

と申しけるに、吳主、

なる程、汝が妹は、女ながらも、奇代の名人だぞ聞いて居るか。試みに召して、申しつけて見よう。

趙達は、忝けなきよしを申して、早速、妹を召しつれけるに、妹は、主に謁見して、

仰せでは御座りますが、山川や軍陣の圖は、畫にかきましては、色もさめ易く、高低なごも、充分にあらはす事が出来かね

技藝に秀でたりし少女

ます故同じくは刺繡にして差上げたいた存じまするが、いかゞで御座りませう。

吳主打ちうなづきて、

いかにもく、其れは左様であらう。兎も角も汝に任せるから然るべきやうに。

この事なりしかば少女は直ちにこの刺繡に取りかくりしが、幾程も無くして出来上りし故、これを主に差上げたり。主先づ打ち披きて見られけるに、山や岳や河や海や、其他軍陣のもやうまで、細かに寫し得て、真に迫りぬ。主大いに驚歎して。

實に人間業とは思はれぬ。……天品である。學んで出来ることでは無い。

是れより兄達におほせて入れて、夫人ごなし、昭陽宮に住まはし



技藝に秀でたりし少女

められけり。主が宮殿の中に麗しき紫の絹の帷ありけるに、夫人打ち見て、

王様、これも結構で御座ります。すけれども、若し私に御作らせ遊ばし、ましたならば、もつと好く作りませうが。

と申ければ、主打ちほく笑みて、

其れならば、夫人の思ふやうに製して御覽。

仰せを受けて、夫人が製作に取りかゝれるは、いかなるものぞ。こいふに、髪を神膠にかはの種類、こいふ物を以て、継ぎ合はせ、織りて羅となしたるなり。これを窓に掛ければ、さながら霞の遠山に打ち靡くが如く、烟の中空に立ち登るに似たり。風吹く毎に、打ちゆらぎて、鉢植の花の香を送るなご、えも云はず懐しければ、主はいよく、不思議の妙手なりと稱して、尊敬せられにけり。斯

くて後、主は常に軍陣にも、必ずこの羅帷を携へて、坐の傍らに掛けつゝぞ愛翫せられにける。されど、寵厚き時は、讒起り、富みて貴きに至れば、嫉み生ずるが世のならひなれば、趙夫人が寵遇のこよ無きを妬む者、頻りに流言を放ちて、趙氏は幻術を以て、君主の明をくらますものなり。云ひあへりしが、遂に寵を失ふもこゝなりて、身の暇を賜ふに至れるは、理學の開けぬ世にて、これを説き、明らむる人も無かりけんこそ、また是非も無き次第なりけれ。

三十六

ロザ、バアンハウル(佛蘭西)

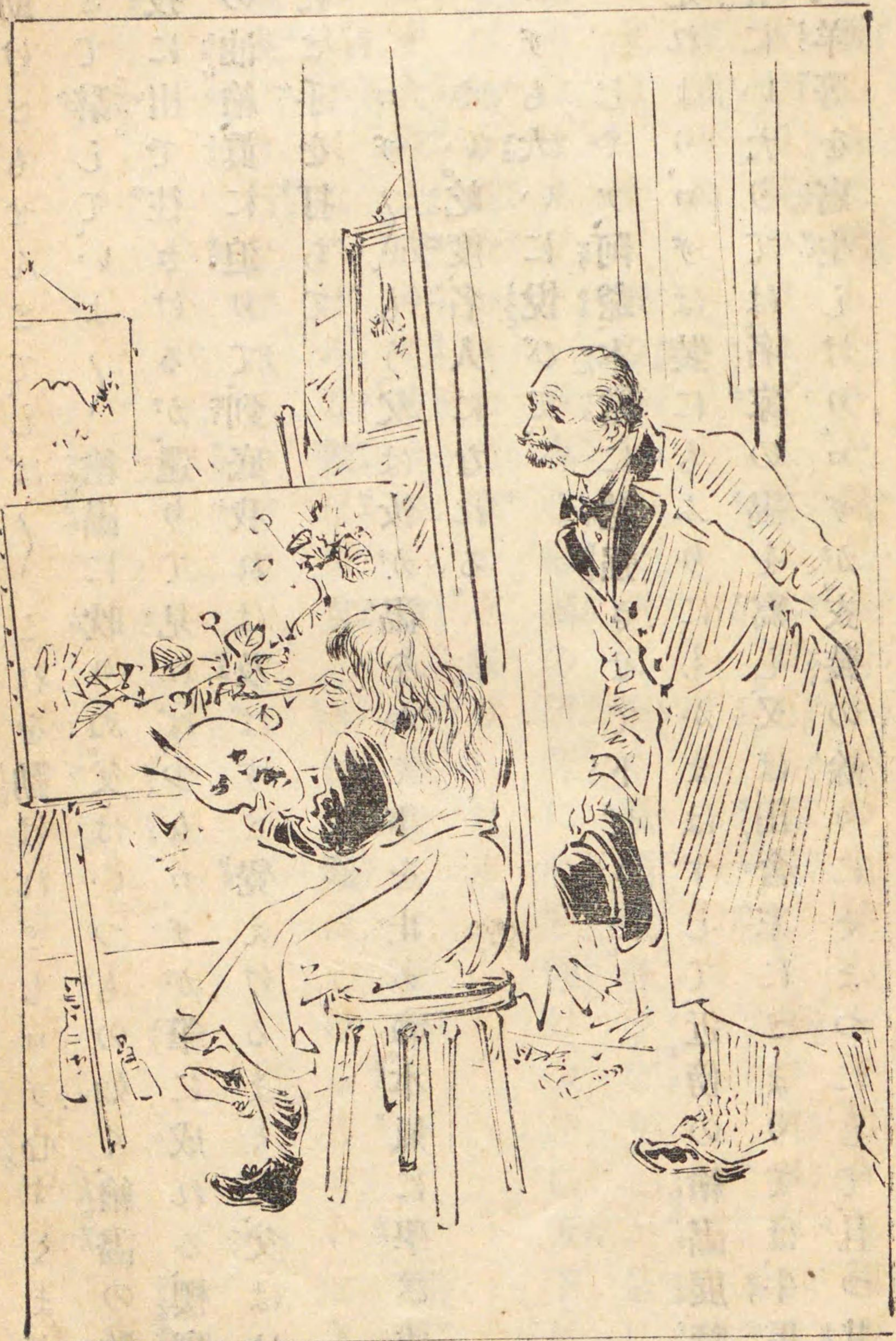
ロザ、バアンハウルは、一千八百二十二年、佛蘭西國ボルドーに生れぬ。父は、圖畫の教師なるが、ロザは、齡四歳ばかりの時より、筆と紙とを翫ぶことを好み、且つ手の届く限りは、壁にも云はず、戸こ

技藝に秀でたりし少女

も云はず。えも知れぬ物の形ちをかき散らして自ら悦び樂し
 けり。ロザはまた紙をきりて、牧者、牛、馬、羊、犬、其他、さまざまの動物
 の形ちをつくるに、其巧妙、殆ど大人も及ばぬ程なりき。
 ロザは性、快濶にして、心ざま雄々しく、常に男兒と遊ぶことを好
 みて、女兒と友たることを好まざりしかば、其祖父は、ある日、ロザ
 が父母にむかひて、

ロザを、汝達は女兒だと思ふか。……あれは、汝、ペテコートを
 つけた男兒だよ。

と云ひし事さへある程なりき。
 ロザが家は、生計の都合にて佛京巴里に移り住みけるが、ロザ十
 三歳といふ年に、母もみまかりぬ。貧困ますく、極まりければ、ロ
 ザが父は、天性、手さきの器用なる女を裁縫師にして、早く活計の



技藝に秀でたりし少女

助けごもせんごて、しばくこれをお勧めれごも、ロザ心すくまず
こて辭して、いよく繪畫に耽りぬ。父はいつもの如く、繪畫の教
授に出で往きけるが、還りて見れば、少女ロザが筆に成れる櫻實
の油繪、眞に迫りて、到底我れは及ばず。覺えけるまくに、父はは
たこ手を打ちて、

ロザく、もう父は汝が畫をかく事を止めぬ。本氣に學び成
さい。屹度名人になれる。

ロザも大いに悦びて、

じやア、阿爺、本當に勉強させて下さい。

是れより、ロザは装にもふりにもかまはずして、近傍の繪畫展覽
會にいたりては、名家の畫を寫し、又は田舎家にこまりては、牛馬
犬羊等を寫生しけり。ロザが衣裝の餘りにそまつにして、且つ其

舉動の殊に男らしきを見て、美術學校の生徒たちも、始めの程は
あざけり笑ひけれごも、遂に其筆力に感服して、再び何事をも云
はず成りぬ。

ロザは、二十三歳の時父を失ひて、全く孤獨の身となりしが、是れ
よりは、ますます一意専心繪畫の研究に心を傾け、つひに天下に
並び無き動物かきの名家ごぞ成りにける。

ロザ、大家ご成りて後は、深く貧人を恵むことを楽しみとし、潤筆
の料多くなれば、みな散じて貧しき民を賑はしけるこそ、いごも
最良じき行ひにはありけれ。

少女文庫 第四編 外國少女鑑終

博學高識女流の名家たる下田歌子
 女史曩に家庭文庫全部十二冊を完
 成して懇切に其學藝を指導し大に
 風教に裨益を與へられたり故に世
 上に此書を愛重すること他書の比
 にあらず今又少女文庫を起稿せら
 れて少婦兒女の讀本に備へらる記
 事懇切文詞莊麗家庭文庫と共に家
 庭教育上缺くべからざる要書なり

一冊	金參拾五錢	郵税
三冊	金壹圓	一冊
六冊	金壹圓九拾錢	錢宛

少女文庫 外國少女鑑 定價金參拾五錢

明治三十五年二月廿一日印刷
 明治三十五年二月廿四日發行

著者 下田歌子

發行者 大橋新太郎

印刷者 齋藤章達

印刷所 東京印刷株式會社
 東京市日本橋區
 本町三丁目八番地

發兌元 東京市日本橋區
 本町三丁目 博文館

少女文庫

少女文庫一たび發刊して江湖婦女諸彦の好評を博すること前刊の家庭文庫に均し而して其程度の低き丈け家庭文庫に比し一層多くの讀者を得たる者なり請ふ未讀の方は須らく繙讀せられよ

第一編 **お伽噺教草** 全壹冊

此書は少女が家庭教育に裨益あらんことを希ふ爲めに東西のお伽噺の中、最も智徳の涵養に利あるべしと思ふものを摘み、猶其れを取捨増減して綴れるものなり、されば咄しの趣考は極めて斬新なるもの多し、その文章體は最も平易を旨として記したれば側ら作文の初學びに裨益あるべし、書中對話體は主として都の詞づかを用ひたれば少女が對話の榮ともなるべし

第二編 **内國少女鑑** 全壹冊

下田歌子女史が家庭教育に熱心なる又斯文に堪能なること今新に喋々を要せず既に此文庫も第三編を發兌するに至れり此度の一冊は我日本に於ける古代より近世迄の少女が傳記に就て大方少女の模範となるべき行爲を細かに取り集めたる者其文の秀麗なる挿繪亦精妙なれば家庭の讀物として無上の寶冊なるべし

第二編 **庭訓お伽噺** 全壹冊

この書は我邦古代のお伽噺より近代のものに至る迄多くの同書類中より其今に至りて可なりと思ふもののみを撰み出せるなり、すべて此類の書は中には面白き趣考のものあり又往古の風俗をたづねる樂とせんには此上なきものありども其詞の解し難き其事柄の少女が耳にすべからざるもの交りたるが故に今の社會には其儘に採り用ゆること能はざるか故に深く此點に注意して其多きより厘を摘み且つ叮嚀に註解を加へたれば年少女子の必らず一讀明瞭に解するを得て大に風教に裨益することあるべし

續編 ●第五編 **家庭の心得**

刊 ●第六編 **學校の心得**

正 壹冊金參拾五錢 ●參冊前金壹圓 ●六冊前金壹圓九拾錢 ●郵稅壹冊に付金六錢づゝ

發兌元 東京 博文館

華族女學校學監下田歌子女史編 坂正臣君書

女子用文習字帖

全貳冊 和裝菊判製本 堅牢印刷鮮明

巧みなる文章も筆蹟美しからねば人之を卑み筆蹟美しきも文章拙ければ人之を侮る之に反して文章筆蹟兼ね全ければ其人を見ずして先づ其人を敬ふの念を生ず文章筆蹟の人の品格を上下せるや甚しといふべし此事女流の日用文に於て殊に然り實に日用文章と筆蹟との練習は婦人のために最も必要の務めなり此書は文と筆と天下の雙絶を集む女流の習字帖として從來之に勝るものなきなり

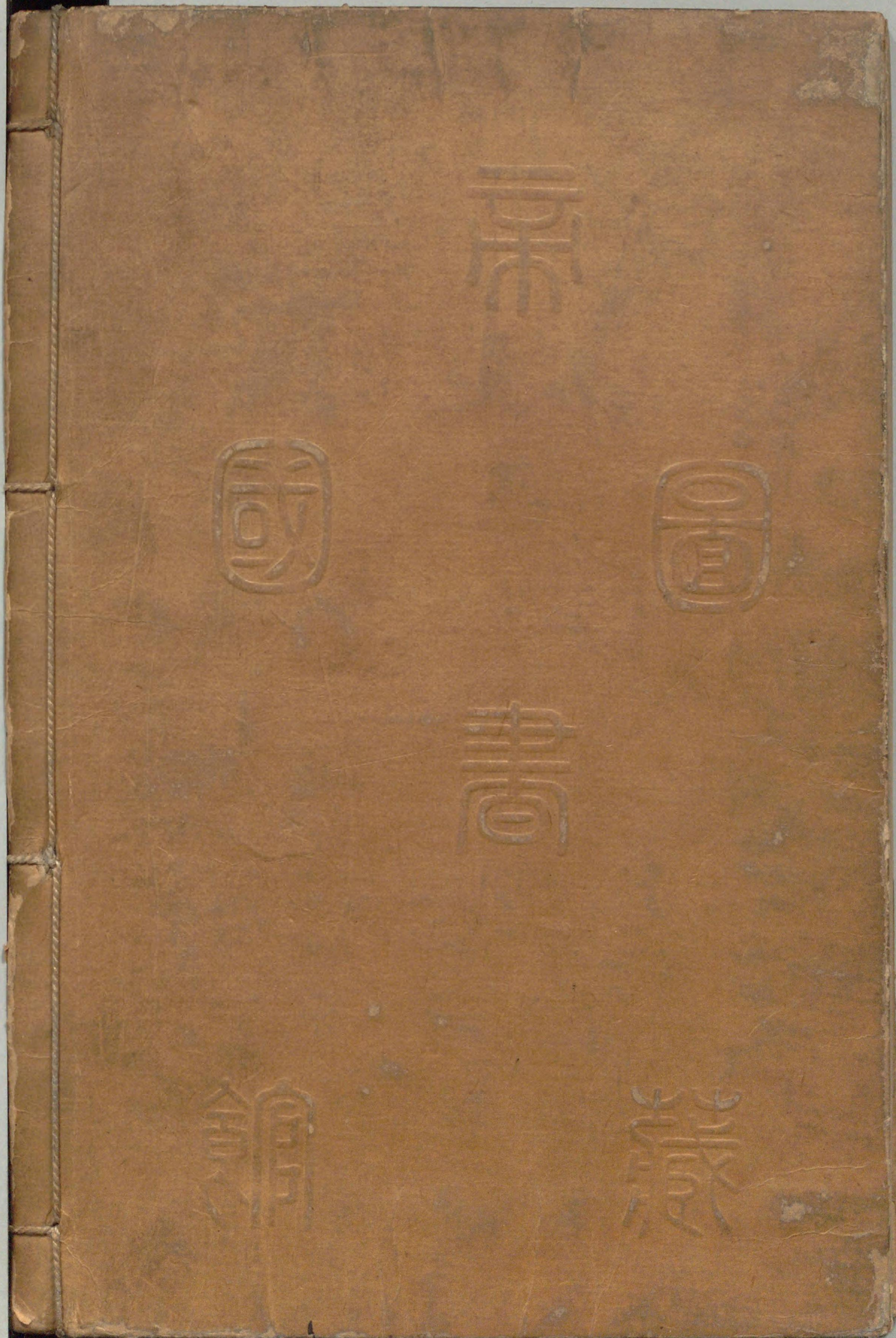
女子習字書

- 成瀬大城君著 **女子習字帖** (全八冊和裝) 郵稅參拾貳錢
- 小學校 大和田建樹君著 小野鶴堂君書 **明治女子書翰文** (全二冊和裝) 郵稅四拾錢
- 河村吉之輔君著 **初學手紙の文** (全二冊和裝) 郵稅參拾五錢
- 橘千陰君書 **新百人一首** (全一冊和裝) 郵稅四拾錢
- 橘千陰君書 **鳥丸帖** (全一冊和裝) 郵稅參拾五錢

116
137

西田敬止君著	下田歌子女史著	岸上操君著	三浦智之君著	西田敬止君著	醫學士三島通良君著	吉田調子君著	博文館編輯局編纂	濱本義顯君著	寒澤振作君著	同君著	坪谷善四郎君著	中島義弼君著	佐々木孝君著	石井治兵衛君著
●帝國女子修身鑑	●家政學	●家政案內	●實用家事經濟學	●育兒と衛生	●はのつとめ	●裁縫と編物	●衣服と流行	● <small>婦女教育</small> 明治姫鑑	●家政の葉	●子供のしつけ	●日本女禮式大全	●新撰小學女禮式	●西洋料理法	●日本料理法大全
全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊
正價五拾六錢	正價六拾錢	正價貳拾五錢	正價貳拾五錢	正價貳拾五錢	正價七拾五錢	正價貳拾五錢	正價貳拾五錢	正價五拾錢	正價貳拾錢	正價拾四錢	正價七拾五錢	正價貳拾五錢	正價貳拾五錢	正價貳圓
郵稅八錢	郵稅拾貳錢	郵稅六錢	郵稅四錢	郵稅六錢	郵稅拾錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	郵稅四錢	郵稅拾六錢	郵稅六錢	郵稅六錢	小包四百匁

116
187



孫

國

圖

書

金

叢